（17）農学教育部会

教育部会名	農学
部会長名／作成者名	部会長：竹中慎治／作成者：竹中慎治

概　　要（2 ページ）

（１）組織・運営について（部会構成、実施体制など）

農学教育部会は、主に農学研究科に主配置されている教員（約 50 名）で構成されている。その中から、3 から 4 名の教員がグループを組み、オムニバス形式で（２）でのべる総合教養科目を実施している。いずれの授業科目についてもとりまとめの幹事（主担当教員、4 名）を置き、授業計画およびシラバスの記載、BEEF による授業内容の告知と履修生からの質問の対応、成績評価等を行っている。

（２）実施状況について

・開講科目、カリキュラムなど

総合教養科目として「食と健康 A」（第 1 クオーター、第 3 クオーター）、「食と健康 B」（第 2 クオーター、第 4 クオーター）、「生物資源と農業 A～D」（第 1 クオーター～第 4 クオーター）を開講している。

・今年度の工夫・改善点

コロナ対応の関係で一部の講義については、オンデマンド型としたが、定員 100 名以上の講義室で開講することから、対面の授業に戻した。また、BEEF を介した課題レポートの提示と解答例や質問への対応も継続しており、コロナ前よりもより双方向のやり取りができるようになったと思われる。

・現状と評価

食と健康 A（福田先生）の講義が今年度のピアレビュー対象授業科目にあたっており、部会長も当日同席するとともに後日開催された意見交換会も出席した。履修生は、デジタル教材（PowerPoint ファイル）を見ながらノートテイクまたは手書き入力やタイピングをしており、コロナ前と比較してよりデジタル教材の活用が進んでいると思われた。当方が担当する「食と健康 A」（第 1 クオーター）も類似した傾向があり、コロナ禍とその対応を経て配布物（紙ベース）からデジタルへの移行と対応がうまく進んでいると思われる。

（３）課題について

・教育部会及び教養教育院における今後の課題

授業科目を担当していた教員の退職が続くため、講義内容や目標を更新しながらも、“農学”の観点から教授・履修できる科目としていくことである。

（４）総合所見

・全体としてのまとめ

「人」や「情報」をも含む「あらゆるもの」が地球規模でダイナミックに移動し、多様な価値観が複雑にぶつかり合う現代において、未来を担い社会をリードする若い世代に求められるのは、自らの判断・行動の礎となる「真の教養」である。本年度の自己点検・外部評価により、異なる学問領域を広く横断的に学ばせる「教養教育」の重要性を再認識した。農学教育部会が担当する 8 つの授業科目は、最新の生命科学から生産環境、流通システムに至るまで人類の「食」に関わるあらゆる要素について幅広い基礎知識を提供するとともに、複眼的視野から自ら考える機会を与えるという共通目標を持っており、神戸大学における教養教育の重要な一翼を担っている。この共通目標はある程度達成できていると思われるが、農学教育部会が提供する教育プログラムの質をさらに高めるために、自己評価で話題に上った点について可能な部分から地道な改善を重ねていく必要がある。

Ａ　組織構成と運営体制について

①基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか（100 字程度）

本部会の構成員から 4 名の主担当教員を選出し、それぞれの講義の内容とカリキュラムの調整、シラバスの作成を行っている。また、定期的に意見交換の場を設けて改善策を検討しており、実施体制は適切に整備され機能していると考えている。
根拠資料 教育部会構成名簿、シラバス

Ｂ　内部質保証について

①学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか（100 字程度）

講義内、あるいはレポート、また授業振り返りアンケートにおいて学生からの意見を収集している。また、農学部会長は定期的に農学部会内で意見交換の場を設け、主担当教員が担当教員から集約した授業に関する意見を持ち寄って改善策を検討している。
根拠資料 毎回のレポート、小テスト、授業振り返りアンケート結果

②自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか（150 字程度）

本部会が担当する 8 つの科目は、いずれもオムニバス形式であるため、講義間のつながりを理解させるために初回のガイダンスや BEEF で全体像を説明している。また、ほとんどの教員がパワーポイントを用いているが、一方通行にならないようにレポートを書かせ次の講義でフィードバックしたり、小テストの解説をするなど、講義に双方向性を持たせるよう部会内で周知している。
根拠資料 前年度までの自己点検・評価報告書、シラバス（今年度の工夫）

③授業の内容及び方法の改善を図るためのＦＤを組織的に実施しているか（100 字程度）

定期的に授業参観（ピアレビュー）を実施している。授業の内容や教授方法について主担当教員や各担当教員間で意見交換を行っているが、学外から講師を招聘しての FD は予算措置がないため実現できていない。
根拠資料 ピアレビュー（授業参観）実施に関するガイドライン、ピアレビュー実施科目一覧（教養教育委員会資料）

④教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるとともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか（100 字程度）

補助を行うティーチングアシスタントを各授業に 1 名（年間のべ 8 名）配置し、成績評価の公平性と厳格化に努めている。しかし、財政難により経費が限られており R4 年度の任用総時間は 52 時間しかなかった。これは、全講義時間の 40%であり各講義の開始前から開始後の 30 分までしか TA/SA を雇用することができていない。
根拠資料 神戸大学 SA／TA 実施要領・ガイドライン、SA・TA 採用者名簿、TA ハンドブック

Ｃ　教育課程と学習成果について

①当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものとなっているか（100 字程度）

農学教育部会が提供する 8 つの授業科目は「食」に関わる諸問題について幅広い基礎知識を提供するとともに、複眼的視野から自ら考える機会を与えるという共通目標を持っており、神戸スタンダードおよび総合教養科目の学修目標に合致している。
根拠資料 シラバス

②授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか（100 字程度）

農学部会長は自己点検報告書や外部評価報告書を作成し、それぞれの科目の主担当教員に回覧している。また、定期的に農学部会内で意見交換の場を設け、主担当教員が担当教員から集約した授業に関する意見を持ち寄って改善策を検討している。
根拠資料 シラバス

③授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか（100 字程度）

個々の科目において、専門分野の異なる教員が生命科学から生産環境、流通システムに至るまで食料に関わる複数の要素をとりあげることにより、上で述べた農学教育部会が掲げる到達目標をほぼ達成していると思われる。
根拠資料 シラバス

④単位の実質化への配慮がなされているか（100 字程度）

すべての講師が小テストやレポートを必ず実施し、それをもとに評価を行っている。出席・受講状況などの平常点に対する評価も各教員間で不均衡がないよう統一のルールを設けている。さらに、自宅学習を促進させるような工夫もされている。
根拠資料 シラバス、小テスト、レポート課題、初回講義で配布するガイダンス資料

⑤教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか（150 字程度）

農学教育部会の科目は何れもオムニバス方式で開講しているため、地球規模での持続可能な食料生産と人類の健康維持に関する諸問題について複眼的視野から考えさせる効果が高い反面、全体像がつかみにくい場合がある。そのため、科目ごとの講師の適正な配置に配慮し、さらに初回のガイダンスで全体像を示すなどの配慮・工夫を行っている。
根拠資料 シラバス

⑥シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前･事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか（50 字程度）

学習目標が明確に定められており、各講義内容、講義時期、評価方法なども明確且つ端的にまとめられている。課題としては、個々の講義ごとに細かな表記の形式が異なっているため、すべての講義で統一した形式を取り入れたほうがよいかもしれない。

根拠資料 シラバス

⑦学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか（100 字程度）

シラバス及び講義中に講師のメールアドレスなどを公開し、オフィスアワー中に対応している。レポートやの小テストの際に行うアンケートの結果を考慮し、学生の多様なニーズに合わせて講義スタイルを修正している。
根拠資料 シラバス

⑧学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか（100 字程度）

講義中及び、講義後に学生からの質問や相談に対応するとともに、次回の講義に反映させるよう努めている。また、シラバス及び講義中に講師のメールアドレスを公開し、オフィスアワー中にも対応している。
根拠資料 シラバス

⑨成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか（100 字程度）

すべての講師が小テストやレポートを毎回実施し、それをもとに成績を評価している。出席・受講状況などの平常点に対する評価基準も講師間で不均衡がないよう定めている。成績分布が適性であるか毎回確認しているが、これまでに不適切であったことはない。また、評価基準に関しては、シラバスに明記し初回の講義で周知している。
根拠資料 シラバス、試験答案、成績分布（教養教育委員会資料）

⑩学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか（100 字程度）

授業振り返りアンケートでは、総合的に判断して「興味深い・食に関する知識がひろまった」もしくは「有益であった」等と答えた受講者の割合が 7 割超であったことから、いずれの講義においても学習目標の達成はおおむね良好であった。
根拠資料 試験答案、レポート、授業振り返りアンケート結果